

ヤスクニ・レポ 268

なぜ新自由主義が今日流行するのか

星出卓也(日本長老教会 西武柳沢キリスト教会牧師)

序. 維新の会が支持を伸ばすのはなぜ?

先の7月10日に投開票を迎えた参議院選挙では、自民党が単独過半数を獲得したこと、のみならず、「維新の会」が得票を伸ばしました。同党が目標にしていた野党第一党の座は獲得できなかったものの、比例区での獲得票数の伸び率は、予想されていた通りでした。それが同党基盤の大阪だけのものではなく、東京選挙区では候補者は落選しながらも、比例区では、東京でも得票を増やしています。地域を超えてじわじわと支持を広げる「維新の会」。彼らの何がそんなに受けるのか?

I. 「新自由主義」というもの

「維新の会」で、すぐ思いつくのは「新自由主義」の路線です。「無駄を省く」の掛け声のもとに、行政サービスの合理化を徹底して推進し、採算の合わない部分はどんどんカットし、民営化を進める。「合理化」とだけ聞けば、聞こえは良いですが、行政は採算性の原理だけでは測れるものではありません。採算が合わなくても、市民の生活にとって必須なインフラに関するものは、市民の生活を支えるものとして維持されなければなりません。本来、行政にとって最も馴染まない原理が「採算性」だったはずですが。

例えば、決して満員になどならない数名だけが利用するような田舎の路線バスは、不採算の最たるもの。ところがこれが「不採算」だからと言って、簡単に切られてしまうと、市民の移動の手段がなくなります。山林地区の家が少ない地方に、電気や水道を整備するのも、やはり採算で考えれば、合わない事業です。しかし、だからといって簡単に切ってしまうと、過疎地域の生活基盤そのものが失われてしまいます。そこで行政が税金を投入してでも採算の合わない事業を支えるのは、それが生活の基盤を保持する必須なものだからです。

しかし、ここに「採算」の原理が本格的に入り始めたのが1900年代。2000年代の小泉改革でアクセルが大きく踏まれました。「自民党をぶっ壊す」のスローガンで既得権益を壊し、タブーの無い改革を、と威勢がよい言葉でしたが、その壊す対象は、様々な採算の原理から市民の暮らしを守って来たものばかりでした。象徴的だったのが「郵政改革」。既得権益と言われると、しがらみのように聞こえますが、郵政事業ほど、採算で測れないものはありません。過疎の地域の郵政サービスなど、採算だけで測られたら真っ先に統廃合の対照です。水道や電力ガスといったライフラインも同様。公立病院も、採算だけで扱われてはならない、最終的に市民の命を守る砦です。そこに民営化が導入され、今や行政は「サービス」のくくりとなった。「小さな政府」のスローガンによって、政府が極力負わず、税金をかけない。民営化によって合理化を進める。これは全国的な流れでもあります。これをドラスチックに大阪で進めたのが「維新の会」だったのです。

II. 新自由主義は、競争原理

新自由主義は、弱者保護の観点には立ちません。つねに採算性が物差し、競争が原理原則です。採算が常に問われる企業経営においても、かつてはすべてが採算性で測られていた訳ではありませんでした。社員の生活基盤を支えるために、企業も賃金は安ければ安いほど良い、という効率化だけの原理では図られてはいませんでした。採算性よりも社員の生活基盤を支えることをより重要な、社会的な使命と考える前提があった。雇用体系の枠組み、制度的保証が大きく変化し始めたのが、「新自由主義」が加速度的に導入された2000年代です。

合理化の対照となったものの多くに、人の生活を根底から支えて来た分野が沢山ありました。合理化の嵐にさらされたことに

よって、暮らしや生活の大切な部分を失った社会的な弱者と言われる層が飛躍的に拡大することとなりました。企業の利益率だけが、競争の対照ではなく、「勝ち組」「負け組」という言葉までもが出現し、生活すらも競争原理に晒され、人としての暮らしがままならない層が飛躍的に拡大。「ワーキングプア」の言葉が生まれました。

Ⅲ. 社会に不安が蔓延すると弱者を叩く傾向が生まれる

格差が拡大し、社会不安が飛躍的に増した今日。このような弱肉強食のような市場原理を強化する在り方への批判が生まれるか、というと、どうやらそうではないのが実態のようです。第一次世界大戦に敗戦し、重い賠償金に苦しんだドイツが貧困に苦しむ中にあっても、より強いドイツの再来を求め憧れる反面、社会不安や貧困や格差拡大の怒りの矛先は、社会的弱者に向かいました。「弱者に金をかけるな。苦しんでいる俺たちに金を回せ」と、批判の矛先は、社会的に弱い立場に置かれたマイノリティーに対して向けられ、自己責任の言

葉で切り捨てられるようになりました。今日においても、格差を生み出す制度や富を一手に集める側に批判が向かうのではなく、むしろ弱者を切り捨てる方向に世論が向かう傾向にあると言われます。ジャイアンが力の弱いのび太を虐げる時、力による支配を行うジャイアンを非難するのではなく、ジャイアンと一緒にのび太を叩くスネ夫心理、と言いますか、余裕の無さが、強い者の側に立ち、弱者をいじめることによって、自分の優越感、自尊心をかるうじて保とうとする傾向に向かわせ、という非常に屈折した自意識が強まる。これが、社会不安が高まる時に、向かい易い傾向だと言われています。

弱者保護の政策を訴える党が伸びず、むしろ新自由主義政党が票を伸ばす。そこには屈折した自意識が、社会不安の中に醸成されつつある危うい社会の一面を現しているように思います。競争から来る優越感と劣等感。この自意識から逃れるものを、福音は持っていると思うのです。神の恵みに生きる教会の日本社会における価値観とその役割は、今日により大きくなったと思っております。

2022年6月17日例会奨励 「神の国はあなたがたのただ中にある」ルカの福音書17章21～22節 日本福音キリスト教会連合西堀キリスト福音教会 須田 毅牧師

パリサイ人たちが主イエスに対して、神の国の到来について尋ねたのは、彼らの熱心さによる。しかし、彼らは主イエスの教えや奇跡を目前にして、それを神のみわざとしては信じていなかった。主イエスはその点をパリサイ人たちに指摘し、また、全ての信仰者に対して問いかけてもおられる。

20節「見える形で」という訳は、直訳的な言葉としては「観察することなしには」と言える。私たちがじっと見守り、私たちが一所懸命に教えを守っていることから計算して到来のタイミングを見極めることができるのか、ということではない。主イエスは「ここ、あそこ」と場所を特定できるものでもなく、「神の国はあなたがたのただ中にある」とおっしゃる。

「あなたがたのただ中に」とは、かつて、「あなたがたの心の奥底に」というように理解される傾向があった(ルター訳も)。確かに、私たちが信仰によって主イエスを信じることは、心の中のことであ

る。しかし、それは神の国が、私たちの心の中だけに収まることであって、外への広がりはない、ということにまでしてしまうはできない。神の国は、主イエスを信じ、主イエスの権威のもとで支配されることを信じる人々のあいだで、現実のものとして存在しているのである。

「あなたがたのただ中に」、それは、信仰によって集う教会の中で、現実になっている、ということでもあろう。また、神の権威による正義や善や愛が、信仰者を中心にして明らかになることで、私たちが生活している家庭や地域でも、「神の国が来ている」と見えてくる。参院選後、改憲勢力潮流が更に強くなり、平和憲法を支持するキリスト者の多くは、暗澹たる思いに襲われているだろう。しかし、キリストの支配を信じて、み教えを具体的に生きるところから、神の国が確かに存在し、広がることが明らかになるはずである。